

生徒主体で取り組む地域になくてはならない学校づくり ～生徒の「やりたい！やってみたい！」を形に～

県立姉崎高等学校

1 はじめに

本校は、京葉工業地域の発展による市原市の人口急増に伴い、姉崎地区の強い要望に応える形で昭和53年に創立された普通科の高校である。昭和58年に1学年10クラスまで拡大したのをピークに、クラス減の動きの中で定員割れや問題行動等による指導困難な時期が続いた。平成16年に県教育委員会から「自己啓発指導重点校」の指定を受け、学び直しの学習指導と徹底した生徒指導の両輪で学校改革に取り組み、現在は、地域からの信頼を回復し、進路決定率も毎年ほぼ100%を達成する学校となっている。

しかし、ここ数年、少子化の進行に加えコロナ禍、入試制度の一本化等の影響により、2年続けて募集定員に満たない状況となっている。また、直近の学校評価による生徒の学校生活満足度が70%台と低く、学校の指導に従いつつも、何らかの不満を抱えながら学校生活を送っている生徒の様子も窺える。

2 目的

在籍する生徒が楽しく充実した学校生活を送れるようにすると共に、2年続けて定員割れを起こしている状況を解消し、本校が地域になくてはならない学校として今後も維持・発展していくことを目的として、生徒の主体的な活動を中心に据え、次の3つの視点で取組を進めることとした。

- (1) 在籍する生徒が「姉高で良かった」と思える学校生活をつくり出すこと
- (2) 生徒が学校組織の一員として学校づくりに積極的に参画すること
- (3) 「姉高に入りたい」と思う第一志望の中学生を増やすこと

3 取組

(1) ルールメイカー育成プロジェクトによる校則の見直し

生徒の目線で学校生活を振り返り、改善したいことを明確にして、生徒自らがその改善に向けて取り組むことで、達成感を味わい自己肯定感を高めること、また、そのプロセスを学ぶことによって課題発見・解決能力や対話力も身に付けることを意図した取組である。

令和3年の2月下旬、生徒会がNPO法人カタリバの主催する「ルールメイカー育成プロジェクト」にエントリーした。「校則」に注目し、全校生徒にアンケート調査をして改善したい「校則」（生徒指導規程）をまとめ、保護者・地域・企業からアンケート調査やインタビューで意見を集約した。原案を作成し、職員と対話を重ねながら合意形成を図り、新しい「校則」を策定した。

どうやって校則を変えていくのだろう？



<キックオフミーティング>

<経過>

R 3. 2～3月 プロジェクトにエントリー
6～8月 立ち上げ

- ・キックオフミーティング・先生宣誓
- ・見直したい校則の検討
- ・生徒・教員のアンケート調査
- ・プロモーションビデオ作成・放映

私たちは生徒の意見を尊重します！



<教員による「先生宣誓」>

8～12月 調査・対話

- ・地元企業への聞き取り調査
- ・最寄り駅、自治会長への聞き取り調査
- ・各学年職員との対話会（3回）

ツープロックはどこまでOK？



<姉ヶ崎駅聞き取り調査>

R 4. 1～3月 提案・改正

- ・提案資料の作成
- ・全HRでの校則見直し対話
- ・試行期間・新ルールの周知

他校と比べてスカートが長い！



<3回行った対話会>

<結果>

女子のスカート丈の変更をはじめ6項目について校則の見直しを進め、令和4年度から新しい校則が適用された。生徒主体の見直しにより、校則を守ることの意味の理解が深まった。また、生徒・保護者・地域・企業へのアンケート調査やインタビュー等を行う中で、生徒を感じる以上に本校が評価されていること、生徒が自分たちの手で学校を良くしていこうとする姿勢を地域が応援していることに気付くことができた。今年度からは、「スクールメイキング・オープン会議」と称する職員と生徒の対話の場を設定し、校則に限らず学校を良くするアイデアを検討することになっている。

取り組んだ生徒からは「校則を守る意味を学べた」「自ら行動して校則を変えられたことで自分の自信につながった」等の声が寄せられた。

この取組については、11月にNHKの「あさイチ」が職員と生徒の対話会の取材に入り、その様子が11月22日に放送された。さらに、今年の8月、文科省の生徒指導提要在12年ぶりに改訂されるニュースに関連して、先行事例としてこの取組への取材が相次ぎ、8月26日のNHK「ニュースウォッチ9」、9月8日のフジテレビ「ライブニュース『イット』」で放送され、9月10日の読売新聞千葉版にも掲載された。

(2) 地域活性化の核となるカフェ「青葉ノアール」の運営

令和3年11月23日、生徒会が近隣の青葉台町会と連携して、空き店舗を活用した地域住民の交流の場となるカフェ「青葉ノアール」をオープンさせた。

令和2年度、青葉台町会が立ち上げた地域活性化を目指す39PJ（サンキュ

一プロジェクト)に生徒会がスタートから関わった。その会議の中で、「地域住民と関わりながら学校で習わないことを学びたい。自分たちが考えた商品を扱ってほしい」という提案にプロジェクトが動き出し、実現にこぎつけた。当日は、生徒が考案した、姉崎の特産物であるイチジクを練り込んだ焼き菓子やお汁粉を販売し、吹奏楽部の演奏も加わって、盛大なオープンイベントとなった。

町会の方々が集まるプロジェクトの中で提案したアイデアが形となったことで、生徒の達成感につながった。提案した生徒は「地域の方々とまちづくりをしていく一歩にしたい」とさらなる意欲を示していた。この取組をまとめ県教委に申請したところ、キャリア教育分野で「文部科学大臣表彰」を受賞した。

焼き菓子・お汁粉おいし
いですよ！



<カフェのオープン>



<「文部科学大臣表彰」受賞>

(3) 「ふるさとを愛する会」による市原市と連携した歴史的遺産の保護・啓発活動

令和3年4月に「ふるさとを愛する会」を同好会として立ち上げた。以前から歴史担当教諭が有志を募り、「歴史の旅マップ」作成や旧鎌倉街道・久留里街道の道標作成・設置等に取り組んでいたが、同好会を組織することで、計画的・組織的に市原市をはじめ史跡保護団体等と連携し活動できるようになった。「やりたい！」生徒が集まり、結成時は53名、今年度の1年生を加えると100名超の大所帯となった。

① 「歴史の旅マップ」作成 (令和元年作成、令和3年改訂版作成)

このマップは、歴史担当教諭と日本史選択の生徒で地域を取材し、史跡を地図に落とし込んで完成させた。市原を訪れる観光客に喜んでもらうため、地域の飲食店の案内も掲載して実用的な旅マップに仕上げた。このマップは、地域の飲食店や道の駅、サービスエリアにも置かせていただき、活用してもらった。



<歴史の旅マップ>

② 旧鎌倉街道・久留里街道の道標作成・設置

姉崎にある史跡の保護・啓発活動として、市原市と連携し、放課後や学校の休みを活用してフィールドワークを行い、旧鎌倉街道や旧久留里街道の整備を行った。生徒は改めて市原市の、そして姉崎地域の歴史的な価値を知り、「大切に保存しなければ」と郷土愛を培うことができた。



<地域の方々と道標設置>

③ I Museum オープンに係る広報及びオープンイベント（予定）

2022年秋にオープンする市原歴史博物館の紹介を「ふるさとを愛する会」が担当することとなり、2021年の「広報いちほら」11月号で表紙を含め8ページにわたり、生徒主体の紹介記事が掲載された。また、今年の11月20日のオープンイベントも協力する予定である。

私たちが紹介します！



<市原歴史博物館前>

④ 椎津城跡の整備活動

昨年度の「ふるさとを愛する会」の立ち上げから年に数回、地元の中世の史跡「椎津城跡」の整備活動を行っている。今年度2回目の活動では、生徒約100名が参加し、落枝や伐採した竹をバケツリレー方式で運び出した。参加した生徒は「地元にある歴史的に重要な城跡のために貢献することで、地域に恩返ししている気持ちになる」と声を弾ませていた。

ボランティア活動で地域に恩返ししたい！



<椎津城跡の整備活動>

(4) ダンス部による君津・木更津地区の地域活性化イベント参加

令和3年5月にNPO法人所属の音楽バンドからイベントへの協力依頼があった。7・11月に木更津駅前の路上ライブでダンスパフォーマンスを披露し、12月には、袖ヶ浦駅前広場でのイルミネーション点灯式でもダンスパフォーマンスを行った。今年の8～10月には、袖ヶ浦海浜公園でアウトドアフェスタ、五井のアリオでのハロウィンイベント等でダンスパフォーマンスを披露した。11月には市原歴史博物館のオープニングセレモニーでもダンスパフォーマンスを披露する予定である。全校生徒の約半数が君津・木更津地区から通う本校にとって、ダンス部の活躍は絶好の広報の機会となった。



<点灯式でのダンス>

(5) 生徒会による中学校訪問（中学生対象説明会）

生徒会役員の中から、校則見直しやカフェ「青葉ノアール」の運営等自分たちの取組を中学生にも伝え、姉崎高校の楽しさをアピールしたいという声が上がって、生徒が直接近隣の中学校に出向いて「高校生活」や「姉崎高校の良さ」を説明する企画が誕生した。まず、7月に姉崎中学校の家庭教育学級に招かれ、6班に分かれて3年生全員と保護者（希望者）の前でプレゼンテーションを行った。また、10月には千種中学校、有秋中学校、姉崎東中学校3年生の希望者対象に

姉高は生徒会活動やボランティア活動が盛んで楽しいよ！



<プレゼンの様子>

同様の説明会を実施した。“生徒が中学生に『姉高の良さ』を伝える”ことで、中学生への響き方も変わってくる。生徒は意気を感じて一生懸命にプレゼンテーションをしていた。中学生もある時は真剣に、ある時は楽しそうに聞いていた。この取組は、「姉高に入りたい」と思う中学生を増やすために大変効果的な取組であった。

4 成果

今回の取組のスタートは、昨年の1月に生徒会役員が「校則を見直したい」と校長室に相談に来たことから始まる「ルールメイカー育成プロジェクト」であった。このプロジェクトに参加することで、生徒が主体となって学校内外で調査を進め、職員と対立ではなく対話をしながら合意形成を図るというプロセスを体験し、実際に校則を改定することができた。この活動を通して、生徒の積極性や主体性が生まれ、その他の活動に良い影響をもたらし、青葉台町会と連携したカフェの運営や、ダンス部による地域イベントへの積極的な参加、ふるさとを愛する会による市原市と連携した地域の史跡の保護や博物館の広報、生徒会による中学校訪問等へと広がりをみせた。

また、今回の取組に直接関わっていない生徒を含め、生徒全体の雰囲気がそれまでより明るくなり、挨拶をする生徒が一層増えたように感じる。

学校としても、入学者選抜の定員確保を目指し、生徒の活動に刺激を受ける形で「スクールメイキング・プロジェクト」を立ち上げ、取組をまとめ職員会議等で提示し、経過を報告した。教室棟トイレの技能員による改装や、BYOD回線への生徒の端末の接続をはじめとするICT環境の整備、各部活動で中学校を招待しての合同練習や練習試合、新たな広報ツールとしての学校インスタグラムの開設等、「できることはやろう」という姿勢で職員も取り組んできた。職員と生徒が各々できることに全力で取り組むことで、“地域になくてはならない学校”の土台ができつつあると考える。

5 取組への反響

校則見直しの取組は、NHKの「あさイチ」での放送、また千葉日報や毎日新聞への掲載など反響が大きかった。今年の6月には、木更津地区の中学校が所属する生徒指導部会の研修に生徒会担当の職員が招かれ、取組についての講話を行った。8月の生徒指導提要改訂の発表の際にもNHKの「ニュースウォッチ9」やフジテレビの「ライブニュース『イット』」で取り上げられた。いずれもテレビや新聞を見た保護者や地域の方々、中学校の職員等から称賛の声をいただいた。

市原市役所や青葉台町会と連携した取組等でも、さらなるイベント等への協力依頼がたくさん来ている状況である。

6 今後の方向性

今回の取組を通して、市原市役所、市原歴史博物館、青葉台地区等との連携がより強固になったことから、今後も持続可能な連携を進めていく。職員と生徒で学校を作るための「スクールメイキング・オープン会議」を毎年定期的で開催して、生徒総会や全校評議会が出た意見を集約し、学校をより良くしていく議論の場としたい。

7 広報・報道実績

(1) ルールメイカー育成プロジェクト

① 新聞掲載

千葉日報 (日刊) 2022年(令和4年)1月24日(月曜日)

生徒主体で校則見直し

姉崎高校 スカート文、髪形の制限…



生徒主体の話し合いを一つの発りにしてきた市原市の私立姉崎高校が、生徒主体の校則見直しに乗り出した。生徒会長の山村尚志教諭(28)は、「一人一人の個性を尊重したい」という理念を掲げ、数字の成長を目的とした喜びの一方、伝統と古い風習の廃止も実施した。

「友達が『スカート文が長すぎる』って不満を言っていたんです。昨年11月2日、生徒会長の菅原あづさ(18)が、髪型を始めたきっかけを語った。スカートは膝下まで伸び、ツープロック禁止といった髪形の制限なども撤廃した。

20年近く前の姉崎高は教育困難校とされ、進学率が年間数人に上り、多くの生徒が進学先や就職先が決まらず卒業していた。当時の校長は立直しのため「髪型・金髪ゼロ」を掲げて指導を徹底し、校内が落ち着いた雰囲気。校則は「いつでも面接に行ける清潔な生徒」というスローガンとして受け継がれ、教員も当然のものとして受け継がれた。

そんな状況に疑問を感じた山村さんが山村教諭に相談し、生徒の副顧問(58)に直談判、

最高の題材

「友達が『スカート文が長すぎる』って不満を言っていたんです。昨年11月2日、生徒会長の菅原あづさ(18)が、髪型を始めたきっかけを語った。スカートは膝下まで伸び、ツープロック禁止といった髪形の制限なども撤廃した。

教員と対話し「納得解」へ

すると「自分たちで意思をまとめて、先生方を納得し、納得する形でやるなら大いに結構」と同意された。山村教諭が勧めた教育NPO法人カタリバの「ルールメイカー育成プロジェクト」に参加し、生徒と教員の話し合いを第三者がサポートしてくれることになった。

経済産業省が支援するこのプロジェクトは「出た行動」を盛り、立派の異なる視点で対話し「納得解」を導く力を育てる狙いがある。ビジネスを含む今後の社会で求められるとの考えで、経済産業省の担当者は「校則は最高の題材」と強調する。

カタリバプロジェクトを担う山本晃史さん(33)は教員を巻き込むことを重視し、「従来の指導を『プラン』と切り捨てるのではなく、生徒と教員で一緒に考えている」と主張する。

(17面に続く)

千葉日報 2022(令和4年)1月24日(月)1面

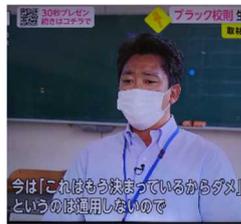
② テレビ放送



NHK総合 2021年(令和3年)11月22日放送「あさイチ」



NHK総合 2022年(令和4年)8月26日放送「ニュースウォッチ9」



自ら行動して校則を変えたことで自分の自信につながった！

校則を守る意味を学べた！

フジテレビ 2022年(令和4年)9月8日放送「ライブニュース『イット』」
 (2) カフェ「青葉ノアール」



千葉日報 2021年(令和3年)11月24日(水)

(他) 広報いちはら 2022年(令和4年)1月1日(土) P10~14

(3) ふるさとを愛する会



広報いちはら 2021年(令和3年)11月1日(月)P1(表紙)~8



千葉日報 2022年(令和4年)6月20日